

(公財)ポークラ伝統文化振興財団  
平成26年度 第34回『伝統文化ポークラ賞』を決定  
～工芸・芸能の分野8件が受賞～

公益財団法人 ポークラ伝統文化振興財団(理事長 小西尚子)は、顕彰事業の一環である第34回『伝統文化ポークラ賞』の各受賞者を決定しました。今年は優秀賞2件、奨励賞1件、地域賞5件合計8件を表彰します。ポークラ・オルビスグループは、「財団法人ポークラ伝統文化振興財団」を昭和54年12月に設立し、文化を通して人間の本質を貫く感性を継承する活動の支援を続けています。『伝統文化ポークラ賞』は、伝統工芸技術や伝統芸能、あるいは民俗芸能・行事など無形の伝統文化の分野で貢献され、今後も活躍が期待できる個人・団体に対して贈呈し、更なる活躍と業績の向上を奨励して表彰するものです。昭和56年の第1回から今年で延べ284名の方が受賞されることとなります。なお、賞贈呈式は、10月23日(木)、ANA インターコンチネンタルホテル東京にて執り行う予定です。

## 【受賞者一覧】

賞	受賞内容	受賞者・代表	賞	受賞内容	受賞者・代表
優秀賞	福岡県 型絵染の伝承・創作  釜我 敏子(75歳)		地域賞 (北陸・ 甲信越・ 東海 ブロック)	新潟県 三条打刃物の伝承・振興  越後三条鍛冶集団	
優秀賞	東京都 歌舞伎舞踊の保存・振興  藤間 勘祖(68歳)		地域賞 (近畿 ブロック)	和歌山県 杉野原の御田舞の保存・ 伝承  杉野原の御田の舞保存 会	
奨励賞	東京都 地歌箏曲の保存・伝承  福田 栄香(50歳)		地域賞 (中国・ 四国 ブロック)	岡山県 白石踊の保存・伝承  白石踊会	
地域賞 (北海道・ 東北 ブロック)	青森県 イタコのおしら遊びの伝承  中村 タケ(82歳)		地域賞 (九州・ 沖縄 ブロック)	宮崎県 綾町の染織技術の振興  秋山 眞和(72歳)	

## ◇「伝統文化ポーラ賞」表彰の趣旨

わが国の貴重な伝統文化に貢献され、今後も活躍が期待できる個人または団体に対し、更なる活躍と業績の向上を奨励することを目的とします。具体的には伝統工芸技術や伝統芸能、あるいは民俗芸能・行事など無形の伝統文化の

1、保存・伝承のために欠くことのできない基礎的な仕事

2、「技」または「芸」または「行事」等の保存・伝承

3、保存・振興のための研究や普及活動

を対象とし、これを顕彰するものです。

## ◇表彰内容

1) **優秀賞** 賞牌・賞状・副賞(100万円)

永年地道に努力・精進され、優れた業績を残し、今後も一層の業績を上げることが期待できる個人または団体。

2) **奨励賞** 賞牌・賞状・副賞(50万円)

将来に向けて、大きな業績を上げ貢献することが期待できる比較的若い個人または団体。

3) **地域賞** 賞牌・賞状・副賞(50万円)

地域において、これまでに優れた業績を残し、今後も一層の業績を上げることが期待できる個人または団体。

(全国を「北海道・東北」、「関東」、「北陸・甲信越・東海」、「近畿」、「中国・四国」、「九州・沖縄」の6ブロックに分けて選考。)

### 【メディア関係者さまのお問い合わせ先】

株式会社 ポーラ・オルビスホールディングス コーポレートコミュニケーション室 鈴木(rika-suzuki@po-holdings.co.jp)

〒104-0061 東京都中央区銀座1-7-7 ポーラ銀座ビル TEL 03-3563-5540 / FAX 03-3563-5543

【お客さまのお問い合わせ先】公益財団法人 ポーラ伝統文化振興財団 TEL 03-3494-7653 / FAX 03-3494-7597

## 【受賞者紹介】

### ◇優秀賞

#### 釜我 敏子 型絵染の伝承・創作 福岡県

型絵染は、和紙を貼り合わせた渋紙に独自の世界観をあらわした模様を彫り、布地という限られた空間に防染糊を置き、染料を使って染める手法。釜我敏子さんは、そのデザインのモチーフとして、自然の中で咲くタンポポやハマエンドウなどの野の花にこだわる。切り花にはない、地面から力強く立ち上がる植物の様子や生命力に魅せられ、野外で丁寧にスケッチをしてデザイン化する。次に3種類の小刀を使い分けて型紙を作る。小刀を渋紙にあてて一気に引いて切り抜くためには、切れ味が命。その刃の音を耳で確かめながら、研ぐ頃合いをはかっているという。また、型紙を切り抜く時には、すでに染める反物の生地が決まっているとも語る。

昭和43年、釜我さんが型染を本格的に始めたのは、この世界では遅く、30歳を過ぎてからのこと。趣味で始めたロウケツ染めにのめり込み、鍋島更紗の故・鈴木照次氏の元で学んだ卒業生に手ほどきを受けた後、翌年には佐賀大学教授で「逆廻り染技法」の技術を持つ故・城秀男氏の研究会に聴講生として入り、デザインを形にすることから学び始める。その一年後の昭和45年には「第5回西部工芸展」に初出品し、奨励賞受賞という快挙。この時に美術評論家の河北倫明氏に評価されたのを励みに、それまで独学だった糊づけなどの基礎技術を学び直すことを決意する。幸運なことに、ある会合で本藍染めによる長板中形で人間国宝の、故・松原定吉氏のご息たちに出会い、その貴重な技術習得の機会を得ることになる。

そのかいあって、昭和51年に「第23回日本伝統工芸展」に初出展して入選後は32回の入選を果たし、昭和54年には念願の日本工芸会正会員に認定された。また、平成17年には福岡市文化賞を受賞。平成19年には海を越えた大英博物館主催の「わざの美・伝統工芸の50年」に出品した。

このほか、九州産業大学芸術学部や香蘭女子短期大学などで講師、日本工芸会西部支部の常任理事などの役職を長年務めた。現在は公益法人福岡県美術協会理事。型染だけではなく地元の博多織などの研究も進め、後進の指導も積極的に行っている。



平成24年10月撮影  
自宅工房にて

型絵染制作の一工程、糊置をしている場面。  
長板に布をはり、型紙をのせて、へらで糊を置いていく作業です。

### ◇優秀賞

#### 藤間 勘祖 歌舞伎舞踊の保存・振興 東京都

日本舞踊の流派のひとつの宗家藤間流は、歌舞伎舞踊の振付に重点を置いているのが、その特徴といわれる。宗家藤間流は、始祖・藤間勘兵衛が、弟の藤間勘左衛門とともに、故郷の藤間村（現在の埼玉県川越市藤間）から江戸に上った宝永元年（1704）に始まり、300年以上の歴史を持つ。

藤間勘祖さんは昭和20年、二世藤間勘祖（六世藤間勘十郎）と、藤間紫の長女として生まれ、3歳で長唄『五條坂景清』の禿で初舞台を踏み、昭和41年『鏡獅子』で本格的に日本舞踊の世界へと進む。その後、平成2年に七世藤間勘十郎を襲名。平成14年に三世藤間勘祖を襲名した。

現在の藤間勘祖さんは七世宗家となり、父である先代の勘祖師より早くから指導を受け、宗家藤間流を継承するだけでなく、歌舞伎舞踊の振付でも頭角を現してきた。昭和49年には、弱冠29歳で歌舞伎座「芸術祭参加十月大歌舞伎」公演の『舞鶴五條橋』で歌舞伎舞踊の初振付を経験。それを皮切りに、今日に至るまで全国で行われる歌舞伎公演の振付のために、東奔西走している。また、独立行政法人日本芸術文化振興会の養成事業の歌舞伎分野の指導、監修にも携わっている。こうした活動から、平成8年度日本芸術院賞を受賞。



ニューヨークでの弟子の稽古の様子

平成26年7月 NYスタジオにて

昨年4月に開場した、新しい歌舞伎座柿葺落しの幕開きで、坂田藤十郎、中村魁春、市川染五郎が演じた『壽祝歌舞伎華彩 鶴寿千歳』も当代勘祖さんの振付によるもの。また、歌舞伎俳優の幹部から若手に至るまで、日常的に舞踊指導を行うなど、歌舞伎界の発展を支える力として信頼、評価されており、今回のポーラ賞の受賞へ結びついた。当代の歌舞伎俳優たちが、藤間勘祖さんに全幅の信頼を寄せているのは、常に相手の立場になって振り付ける、真摯で確かな指導力だ。

また藤間流宗家として門徒の指導と育成、花柳界の舞踊指導、「藤間会」を始めとする舞踊会の主催、監修なども務めている。

## ◇奨励賞

### 福田 栄香 地歌箏曲の保存・伝承 東京都

地歌箏曲とは本来は座敷などで弾き語られ、内に秘めた情念を、聴く人の心に響かせ伝えるというところに特色がある。その地歌箏曲家として、昭和39年生まれ、九州系といわれる「三つの音会」の三代家元として、第一線で活躍中の若手演奏家である。

「三つの音会」を創立した初代福田栄香を祖母に持ち、二代家元であった故・福田種彦が父という恵まれた家柄に育ち、平成21年に二代福田栄香を襲名している。今や地歌箏曲の大きな芸系となった九州系は、その祖となる宮原検校の門人で天才長谷幸輝(後の長谷検校)が、熊本から東京へ進出してきたことから、今日の「三つの音会」の活躍が始まる。祖母の初代は艶やかな美声が「長谷の三羽鳥」と評判になり、『東京三曲名家一覽』に“西の横綱”と評された逸材であった。

その血を引く二代福田栄香氏は、幼少の頃から、父に箏・三弦を師事。3歳で初舞台を踏み、昭和63年には文化庁国内研修生となり、平成4年には初リサイタルを開き、平成5年には文化庁芸術祭賞を史上最年少の29歳で受賞するという快挙を成し遂げた。また、平成11年のドイツ公演を皮切りに数多くの海外公演や大学などでワークショップも開催し、精力的に活動している。

「三つの音会」の家元としては、定期演奏会や賛助出演、合奏研究会などの活動を積み重ね、公益社団法人日本三曲協会や生田流協会の理事も務めており、その中では「文化芸術による子供の育成事業」など、子供たちや若手に向けた邦楽の普及にも企画推進から携わっている。

さらには、自身の新しい境地の開拓として、新企画地歌「うた語り(源氏物語シリーズ)」も始めており、歌の力量、三弦の技術はもとより、音楽性、人間性、指導力が評価されて今回の受賞となった。



平成24年  
地歌箏曲 福田栄香の会  
～古典うた語り  
(於 紀尾井小ホール)

## ◇地域賞

### 《北海道・東北ブロック》中村 タケ イタコのおしら遊びの伝承 青森県

昨年11月、中村タケさんの唱え(おしら遊び、口寄せ、まじない等)が生み出す「声の力」は、DVD記録大全集「イタコ 中村タケ」(イタコ 中村タケを記録する会)として出版された。民俗資料として、音楽史の立場からも貴重な資料として、平成25年度文化庁芸術祭賞レコード部門の優秀賞を受賞している。

信仰、習俗、音楽が一体となっていると称されるイタコの中村さんは、昭和7年、青森県八戸市生まれの82歳になる現役のイタコとして、61もの唱えを記憶している数少ない一人だ。冬の厳しい天候や自然環境の中で生きる東北の人々にとって、イタコは心の拠り所としても歴史と伝統のある存在だ。先の東日本大震災の遺族たちにも、精神的な癒しや支えとなっているときく。



平成25年 自宅にて

その存在は、人々の悩みや苦しみを和らげるだけでなく、民俗芸能や音楽史、文化史の観点からも“貴重な民俗文化財”として注目され、今回の受賞となった。

受賞の対象となった「おしら遊び」は、旧正月に行われる春迎の儀礼である。そこで祀られる東北地方独特の神「おしら神」は、イタコが「おしら祭文」を唱えながら両手に嵌めて男女一対の人形（おしら様）に憑依し、「託宣」として、イタコの口を借りてこれから先一年の農作物の出来具合や吉兆を占う。

中村さんは、3歳の時に罹ったはしかで視力を失い、昭和19年に12歳でイタコの師匠である谷川ハル氏に入門。昭和22年に15歳で独り立ちして以来、厳しい修行を積み、65年間以上におよびイタコの業をこの地元で続け、人々の心に寄り添うイタコの伝承者として、民俗芸能の体現者としても貴重な存在になっている。そして、今日のような「おしら遊び」など、「唱え」が持つ「声の力」としても自身の技を昇華させている。

## 《北陸・甲信越・東海ブロック》 越後三条鍛冶集団 三条打刃物の伝承・振興 新潟県

「金物のまち三条」といわれる新潟県三条市で、地元の27の事業所の鍛冶職人を中心に「越後三条鍛冶集団」が結成されたのは平成5年のこと。昭和のバブル期以降の大量生産による安価な商品づくりにはない、優れた質のよい「三条打刃物」の技術を見直して欲しいという考えからだった。口伝や勘だけではない技術の向上と、販路の開拓を目指して活動しており、その技術から生み出される製品群の「三条打刃物」ブランドは、平成21年4月に経済産業大臣から伝統的工芸品の指定を受けている。

三条打刃物の歴史は古く、弥生時代の遺跡から鉄斧が出土しており、すでに肥沃な新潟平野で行われていた農業用の農機具の需要から始まったとされる。江戸時代の明暦年間には、領主の命により18軒の鍛冶屋が集まった鍛冶町もつくられた。さらに新田開発に伴う鎌や鍬などの需要も増え、「三条打刃物10品目」として鑿や鉋、木鋏、鉋や包丁、切出小刀といった建築や林業などの産業や生活用具に即した金物や刃物も作られるようになった。

三条打刃物の特徴は、自由鍛造技術を駆使した手造りで、分業ではなく完成まで一人の職人が作り上げるものづくりにある。製品を作るために必要な「ヤットコ」などの道具類までも作るという、創意工夫の技術が蓄えられている。また、農家の副業として派生した「和釘」も伊勢神宮の式年遷宮に納入されるなど、その鍛冶技術の高さが証明されている。

この鍛冶集団の活動は、結成当初からの鍛冶体験講座をはじめ、平成17年に竣工した「三条鍛冶道場」を拠点に、一般を対象にした「切出小刀づくり」や「包丁づくり」を定期的に行い、三条市が行う「新規鍛冶人材育成事業」で研修生を育成するなど幅広く多岐にわたっている。また、市内の小・中・高校の体験授業の指導や、県外で開かれるイベントにも講師として積極的に参加。平成24年度には鍛冶研修生を3人受け入れ、伝統工芸士を4人輩出するなどの実績を挙げている。



平成25年9月22日撮影。  
新潟県伝統工芸品展にて、伝統的工芸品の展示、包丁研ぎの実演、包丁研ぎの体験を実施した際の様子。

## 《近畿ブロック》 杉野原の御田の舞保存会 杉野原の御田舞の保存・伝承 和歌山県

杉野原の御田舞は、和歌山県有田川町の杉野原地区に伝わる豊作を祈願する伝統ある芸能のひとつ。隔年の2月11日に、国指定重要文化財の雨錫寺阿弥陀堂で行われる。御田とは、御田祭や御田植祭の略称で、田遊びとして一年間の稲作の過程を歌や踊りを模倣的に演じ、その年の正月に五穀豊穡を神社などに祈願する予祝行事とされる。室町時代中期に始まったともいわれ、江戸時代の絵図や、御田台本とされる書物に「御田擣」という名称で残されている。戦争や水害などで一時中断されることはあったが、今日まで綿々と続いてきた。

有田川流域には、かつて9地区で正月行事として御田が伝承されてきたが、現在は杉野原を含めて3地区で、雨錫寺阿弥陀堂のような舞殿を持つのは杉野原だけである。昭和41年には和歌山県無形民俗文化財の指定を受け、昭和62年には国の重要無形民俗文化財に指定された。そして、平成6年には和歌山県文化奨励賞を受賞している。

通常の御田行事は田植えの場面までが多いが、杉野原の御田舞は、田起こしから収穫や糶摺りまで稲作の20を超す生産工程を舅が婿に教えるという形で演じられる。舞に先立ち御渡りの後、12～13人の禪姿の屈強な男衆が円陣を組み、紫燈(大火鉢)を囲んで太鼓を打ち、「謡雑」を唄いながら回り踊る「裸苗押」があり、それらが杉野原の御田舞の特徴といわれている。

昭和40年に「杉野原の御田の舞保存会」が発足し、昭和52年からは隔年の奉納になり、現在は平成の偶数年の2月11日に実施されている。この御田舞は主役が30代までというほど所作の動きが激しく、伝承のために隔年開催や演技時間の短縮など、時代の変化に添いながら伝統を守るよう取り組んできた。その一環として、地元の小学校と連携協力し、地域学習として子供たちに御田舞の中の「田植え子」の役を指導するなど、後継者育成の努力を続けている。その保存継承に関する活動と業績が認められ、平成16年には地域文化功労者表彰を受賞している。

## 《中国・四国ブロック》 白石踊会 白石踊の保存・伝承 岡山県

白石島は、岡山県笠岡市の港から約12kmの瀬戸内海に浮かぶ人口600人ほどの島。天然記念物の鎧岩など全島が国の名勝地に指定されており、夕日の美しい島としても知られる。その島で8月13日から16日までの夜に行われる白石踊は、約800年前から伝わる盆踊り。祖先の霊を供養するための踊りに由来し、「回向踊」とも呼ばれている。1183年の源平水島合戦の戦死者を弔うことから始まったともいわれている。

音頭取りと太鼓打ちを囲んで輪になって踊るこの輪踊には、男踊、女踊、娘踊に笠踊、扇踊など13種類もの踊が伝わっている。それぞれの衣装で、夕日の浜辺で和傘を中心にして踊る幻想的な美しい踊りは、島民の日常の暮らしに溶け込んでおり、島民全員が踊れることが誇りになっている。

この踊りを継承していくために、昭和3年結成され、その後島民全員が会員で運営される白石踊会は、島を訪れる観光客をはじめ、島外でのさまざまな大会で白石踊の伝承と普及に努めている。その活動が実を結び、昭和32年には岡山県重要無形文化財、昭和51年には国の重要無形民俗文化財に指定された。

近年は島の過疎化や高齢化が進み、後継者不足が心配されているため、積極的な伝承や普及活動に取り組んでいる。具体的には、島外の高校に進学するまでの子供たちに白石踊を身に付けてもらおうと、地元の小・中学校との連携を図り、毎月の総合学習の授業で白石踊の指導を行ってきた。また、島外にも出前体験講座を実施して、白石踊の知名度や意識を高めている。こうした島民全員が白石踊を中心として地域社会の問題解決に取り組む姿勢は、平成13年にはおかやま県民文化大賞、平成19年には地域伝統文化功労賞なども受賞している。



平成26年2月11日に現地奉納した御渡りのシーンです。雨錫寺境内にある河津明神社の鳥居から石段を進む様子で区長に続き保存会長は演技者の先頭で進みます。



平成22年2月28日  
NHKホールでの第10回地域伝統芸能まつりに出演。

## 《九州・沖縄ブロック》秋山 眞和 綾町の染織技術の振興 宮崎県

土からはじまる手仕事の原点を目指し、秋山眞和さんが宮崎県綾町に綾の手紬染織工房を創設したのは昭和 41 年。そのルーツは、沖縄で染織を始めた父の故秋山常磐氏の手仕事にある。戦火で多くの貴重な資材を失い、昭和 26 年に宮崎県で沖縄の技法による織物で再出発した父の仕事ぶりを見て育った秋山氏。その父から染織業を継いだのは、昭和 36 年二十歳の時だった。以来、秋山さんの心の中を占めていたのは、養蚕から染めや織りまでの工程をすべて自ら行える自然環境に恵まれた工房の設立だった。

5年後に若干25歳で立ち上げた綾工房。その周囲はきれいな綾川湧水があり、植物染料を採取できる全国有数の照葉樹林があるなど、自然環境に恵まれている。そこで長年の夢であった繭づくりから、織りまでの一貫作業を研究・研鑽する日々が始まった。織物に仕上げるにも、時代とともに分業になっていったが、本来は繭を育てての糸取り、糸繰り、拵括り、染色、糊付け仕上げとさまざまな工程を経て仕上げられていく。

その中で秋山さんがこだわったのが、最も細くて強く、しかも艶のある糸をつくる日本古来の蚕「小石丸」を育てる養蚕。昭和 60 年代からは、そのために、自ら山を開墾して餌となる桑の樹を植栽し、無農薬の葉で蚕を育てる環境を整えた。そこから糸を座繰り器で丁寧に取り出すことから作業の途につくという、気の遠くなるような手仕事。その研鑽は海外にもおよび、インドネシアへ染織調査をはじめ、昭和 56 年には中南米に貝紫染色の調査に出掛け、翌年には日本産の貝を使った貝紫染めにも成功している。

ただ最高の布づくりをしたいだけという秋山さんのこだわりが生み出した染織の手仕事の姿勢は、昭和 42 年に「西部工芸展」朝日新聞社金賞受賞を皮切りに、「日本伝統工芸展」入選を重ね、平成 7 年には卓越した技能者（現代の名工）指定表彰を受ける。また、平成 9 年には沖縄県立芸術大学の美術工芸学部教授に招聘されて就任、平成 18 年は黄綬褒章を受章している。

現在、常に染織の手仕事の原点を見つめながら作家としての活動をする一方で、工房での染織の体験や後継者育成など、地域の綾町に根付いた地域活動も行っている。



平成 26 年 7 月 22 日撮影  
天然灰汁建て藍染め中の風景